

5. 詩の効用

『詩』第一号で兪平伯君の「詩の進化の還元論」ⁱを読み、彼の“良い詩の効用は深く多数の人に感ぜしめて善に向かわせることである”という定義について、いささか疑問に思ったので、いまは三項に分てわたしの意見を書いてみる。

第一に、詩の効用は、計算するのが難しいと思う。文芸の問題はもちろん社会学の眼光でもって研究できるが、これを唯一の定論とすることはできない。わたしは文学とは終始個人的なものだと認めるが、“それは人々が言いたいのに言えないことに苦しんでいることを言うことができる”から、だからわたしは又人類的でもあると言うのだ。しかしながらそれが言うときは、ただ主観的にそれ自身が言いたいことを言うだけであって、決して客観的に大衆の心情を掴んで、意識的に彼らの通訳となるのでないことも、確かな事実である。かつてある友人と話したことがある。詩の創造は一種非意識的な衝動であり、まるで性欲のように、ほとんど生理上の需要であると。これは当時には戯語でしかなかったけれども、実にすこぶる道理がある。個人が感受するところを表現すれば、そのまま目的が達せられ、その効用があったわけで、この他の功利的な批評が、それがどんなに莫大な金銭・勢力・時間を無駄にしたか、所得は喪失を償えないなどと言ったところで、そんなものは全て関係のない話である。個人の恋愛の中で、いつも大きな犠牲を払うことを惜しまない人がいるが、われわれはその社会における効用は何かと質すことはできない。それは文芸でも同じである。真の芸術家はその本性と外縁との結びつきにもとづき、誠実にその感情思想を表現すれば、自然に価値ある文芸となる、すなわちその効用である。功利的な批評にも一面の理由はあるが、芸術の社会的意義を重視しがちで、本来の文芸的性質を疎かにする。それは文学者は社会を指導する先駆者になれと声高に叫ぶけれども、実際には容易に彼らを駆使して民衆に奉侍する演奏家にしてしまう。これは文学の人生における効用を量る人間の最も注意すべき点である。

第二に、“人を感動させ善に向かわせるのは詩の第二の条件である”。この善ということばはまだ検討の余地がありそうだ。というのはその概念はやはりあやふやに浮遊していて、基準がない。ちょうどトルストイの攻撃する美のように。それを現代に通行する道德観念のいわゆる善と解釈すると、それは不合理な社会の一時の習慣に過ぎず、決して芸術の価値を判断する基準にはなり得ないことは、今では余計なことを言わずともすでに明らかである。もしもクロポトキンの説く道德のように、利己利人を分けない人を指して、個体にも種族にも幸福であるとするならば、当然正しいが、“全にして善美”な生活範囲はとても広く、ほんとうに不道德な文学の他は、一切の文芸作品がほとんどこの中に入ってしまう。クロポトキンの言い方によれば、ただ資本主義や迷信などいくつか人間の生活を妨害するものが悪で、したがっておよそそうした悪を詠嘆しない文芸は全て悪の華ではない。トルストイが反対するボードレールの『悪の華』はそのために善に向かうものと言わざるを得ない。批評家が彼は逆の道を行って自己の救済を図ろうとしたと言うのも、まさに的確な言葉である。彼はインド大麻を吸って“人工の樂園”を作ろうとした、紳士たちから見ると偏屈な醜い行為だが、彼の追求は現世を超えた楽土への欲望であり、紳士たち

の満ち足りた楽天主義に比べるならさらに人間的であり、さらに善なるものである。こうして見ると、善に向かうものは即ち人間の文学で、善に向かわないものは即ち非人間のそれである。これも一つの言い方だが、字面の上ではまだ修正できるようだ。善という字の意義が不定で、誤解を招きやすく、文学はすべからく人に善を為すことを勧める、『明聖經』・『陰騭文』のようでこそよろしいと思われるからである。——こうした名分功過を講ずる“善書”のなかに、善に向かわない食人思想の分子がどれほど含まれ、最も容易に人を非人間的の生活の中に陥れることを誰が知ろう。

第三に、トルストイは芸術の価値を論じて、理解できる人間の数を基準としたが、クロポトキンはその主張に対して、批評して云う、“様々な芸術には皆それぞれ特有の表現法がある、それがすなわち作者の感情を他の人に感染させる方法である。だからそれを理解しようとすれば、それにふさわしい訓練というものがなければならない。たとい最も簡単な芸術品であっても、それを正當に理解しようとすれば、若干の訓練を経なければ駄目である。トルストイがそれを疎かにしているのは、あまり妥当ではないようである。彼の普遍的な理解の基準はいささか牽強を免れない。”この言葉はなかなか道理がある。トルストイは『芸術論』で多くの人が『聖書』の中の物語などを知っていることを引いて、彼らもきっと芸術の高尚な作品を了解できるであろうことを証明しようとしているけれども、全部が全部正しいわけではない。『聖書』の物語はほんとうに芸術の高尚な作品である、だが大多数の人がほんとうに芸術的に理解鑑賞できるかどうかは、疑問なしとしない。われわれが中国人の読経の実例を参照して、キリスト教国の国民民衆の読『聖書』を推測すれば、おそらくその結果はやはり文句の端々だけにしかなく、たとい若干の印象を受けることはあっても、教条的な伝統に災いされて、相変わらず似て非なるものであろう。たとえば中国の『詩経』だが、およそ“読書人”なら一通り読まないものはなく、自分では知っていると思っているが、ほんとうに「関雎」の篇はどんな詩かを知っている人は、千人のうち一人もいないかもしれない。民謡については、流行の範囲はもっと広く、鑑賞認識されているように見えるが、しかしやはり疑わしい。わたしはまだ詳細な研究をしたことはなく、断定できないけれども、どうも中国の小調〔小唄・端唄の類〕の流行は、音楽的なものであつて文学的なものではない、言い換えればつまり音調を重視して意味を軽んずるものに思われる。「十八摸」は中国現代最大の民謡の一つだが、その人を魅する力は“アイアイシア”という声調にあつて肉体美の賛嘆にあるのではないようだ。でなければその描写はもっと精密なはずであつて、——そうならば採るべきものがあつたらう。中国人の諧調の愛好は奇異な事実である。大多数は旧劇を聴くのが好きで新劇を見るは嫌いであることが、その好例であつて、詩文界といえども全く同じである。文理に不通な人が古文も白話も同じように解らないのに、大体が古文を読むのが好きで、白話に反対するのをよく見かけるが、最初はすこぶる不思議に思ったが、今ではその道理がはっきりした。古文を唸るのはまだ声調が耳に快いが、白話を読むのは意味にも声調にもどちらにも得るところがない、だから興味索然たるものになる。文芸作品の作用は当然耳に快いだけではないから、彼らの鑑定を経ても、その感染の力を判定することはできない。たといもう一步進めて、多数の人がほんとうに意味を理解できたとしても、やはり多数決の方法によって文芸の判決を下

すことはできない。君師ⁱⁱの統一思想が、一尊によって定まるのは、むしろ反対しなければならない。民衆の統一思想が、一尊によって定まるのも、やはり反対すべきである。全にして善美な生活を求める道徳に背かない範囲で、思想と行動はそれぞれに自由であって分離してよい。文学者は民衆が自分の芸術を理解できるよう望むけれども、強いて自分の芸術を民衆に合わせることはない。わたしの意見では、文芸はもともと著者の感情生活の表現であり、人に感じさせるのはその自然な効用である。いまもし己を捨てて人に従い、大多数の理解を求めるならば、結果はせいぜい良くても“通俗文学”の見本であって、彼のほんとうの自己表現でなくなってしまう。

※初出：1922年2月26日『晨报副刊』

ⁱ 兪平伯「詩の進化の還元論」 花山文芸出版社の『全集』（1997）にも収めてないようで、雑誌『詩』以外では見るできないようである。

ⁱⁱ 君師 天地君親師は儒教祭祀の対象で、なかでも君と師は統治の根本と考えられ、五四運動前後には、封建礼教の権威主義的な思想を君師主義、つまり専制的権力を振るう保守の象徴として、新しい思潮からは指弾された。